

アグリ・リサーチ

# 21世紀を創る農業・農村

小山智士=編著



家の光協会

アグリ・リサーチ

# 21世紀を創る農業・農村

小山智士=編著

江苏工业学院图书馆  
藏书章



家の光協会

アグリ・リサーチ      21世紀を創る農業・農村

---

昭和61年12月1日      第1版発行

編著者 小   山   智   士

発行者 鈴   木            昭

発行所 社団法人 家 の 光 協 会

東京都新宿区市谷船河原町11

郵便番号 162

電話 東京 260-3151

印 刷 精文堂印刷株式会社

製 本 寿製本株式会社

---

© 1986 Tomoji Koyama

Printed in Japan

落丁本や乱丁本はおとりかえます。

定価は表紙カバーに表示してあります。

ISBN 4-259-51655-8 C 0061

---

## は し が き

昭和61年春、(財)ふるさと情報センターが、都市生活者（首都圏・近畿圏各1,000名）を対象としたアンケート調査結果を発表した。

これによると、自然派志向型（78%）が都会派志向型（48%）の約2倍をしめ、ついで家族中心志向型（60%）が会社優先志向型（32%）の約2倍。ノーブランド志向型（60%）はブランド志向型（17%）の3倍を超え、感覚派志向型（50%）が理論派志向型（37%）に対して優位をキープしていることが明らかになった。これは本書を企画するうえで、最高に興味深いデータとなった。

人間は常に現在を基点として、過去と未来をみている。前記の統計的事実は、情報化社会の中で、都会人たちの価値観、現在をどうみているかという眼が、記号論的にいえば、旧コードから新コードへと大きく転換しはじめていることを教えている。と同時に、新しいマインド社会が到来したことを告げている。

農業・農村の立場にある人々は、この価値観の転換が「自然」「家族」「ノーブランド」「感覚」という4つの文字を貫く、新しい考え方、新しい行動を要請しているという気持ちで、受けとめる感性が必要だろう。

本書の編集は、このような考え方、行動の予兆、ともいべき現象、事例をとらえ、農業・農村側からの新しい提案力、変化力の内容をビビッドに紹介することに焦点をしばった。

その趣旨にそって、執筆メンバーには各人各様の個性を発揮し、目新しい情報、身近な情報、珍しい情報、おもしろい情報を盛り込んでもらうよう協力を仰いだ。また全章を通して、文脈は図説的要素を多くし、できるだけソフトかつ映像的な描写を心がけたつもりである。

---

編序構成は、第1章の国土と緑では21世紀へ向けての国づくりの哲学のアウトラインを紹介し、第2章の農林業・農山村の魅力では、農林業の役割にふれた。第3章の転換期にある欧米の農業政策では、欧米諸国における農業・農村観と農業政策の展開にふれ、第4章の米と日本人では、世界の米との対比で日本の米の位置づけを明らかにし、あわせて戦後における米づくりの足跡を紹介した。第5章では、農業技術のニューウェーブと未来像。第6章の21世紀は高次元・多次元農業のところでは、日本型農業の再評価と21世紀へ向けての農業のイメージにふれた。第7章の日本人の食生活では、現在の日本人の食生活像を新しい切り口から紹介することを試みた。第8章の活気づく農産物自給運動では、近年著しい勢いで全国的なひろがりを見せている自給運動の実態を紹介した。第9章「食」と「農」の接点では、安全性というキーワードを軸に食と農の結びつきの大切さに言及した。第10章“文化時代”のむらづくりでは、活力あふれるむらづくり、ふるさとづくりの実態を全国縦断的に紹介した。第11章では、都市と農村の交流について、最近の新しい動きを紹介した。

第12章高齢化・混住化の中では、農村における高齢者・高齢化問題の諸相を、マイナスイメージでなく、プラスイメージでとらえる視点から事例紹介を試みた。

全体として、国際化、情報化、高齢化の三つのキーワードをめぐる諸情勢を不十分ながら総合的にとらえることはできたと自負している。

時代が読みにくい、見えにくい中で、読者諸氏が本書によって、農業・農村の現在と明日を知る手がかりを得られるならば、執筆メンバー一同にとって、これに過ぎる喜びはない。

昭和61年11月 財農政調査委員会理事 小山智士

## 21世紀を創る農業・農村——目次

### 第1章 国土と緑

1	21世紀の国土観は	10
2	緑ブーム	12
3	人と森林——そのかわりあい今昔	14
4	森と文学	18
5	緑のはたらき	22
	緑のなかで森呼吸	22
	森林——もしなかったら	23
6	森林・山村の未来は	26
	◆山村の健志	28

### 第2章 農林業・農山村の魅力

1	農林業のプラス <sup>ワン</sup> 1 (ダブル) 効果	30
	(1)水と安全	30
	(2)農山村環境	32
2	農林業は五種競技の勝利者	34
3	生業から営業へ——農林業の変貌志願	36
	(1)農業	36
	(2)林業	38
4	成熟化社会に席卷されるか、農林業	39

---

## 第3章 転換期にある欧米の農業政策

- 1 欧米の農業・農村観 .....44
- 2 欧米における食料の安全保障と農産物過剰問題 .....47
  - EC 諸国の自給率向上 .....47
  - EC の価格支持政策と過剰問題 .....48
  - EC の地域政策と環境政策 .....51
  - アメリカ農業の過剰問題 .....54
  - アメリカ農業における環境問題 .....54
- 3 農業保護の各国比較 .....56
  - 農業予算措置による比較 .....56
  - 消費者負担による比較 .....57
  - 内外価格差によって比較する「農業保護水準」 .....58
- 4 欧米から学ぶべきこと .....62

## 第4章 米と日本人

- 1 世界の米 .....64
- 2 米は日本の命 .....69
- 3 稲作農家の戦後40年 .....73
- 4 1粒の種子が水田で .....78
- 5 米からご飯へ .....82

## 第5章 農業技術の未来を開く

- 1 農業技術のニューウェーブ .....88
- 2 バイオは世界を開く .....91

3	コンピュータ時代の農業	96
4	情報産業としての農業（脱1次産業）	101
5	21世紀農業はハイテクタッチで	107
6	生命の世紀がやって来る	109

## 第6章 21世紀は高次元・多次元農業で

1	新しい時代の潮流	114
2	日本型農業の再評価	114
3	農業の多次元化・高次元化	117
	農業の多次元化	117
	農業の高次元化	120
4	地域にみる農業の高次元・多次元化の動き	121
	(1)第1次産業としての発展	121
	(2)1.5次産業としての発展	125
	(3)第2次産業としての発展	126
	(4)第3次産業としての発展	127
	(5)第4次産業としての発展	129
5	今後の農業経営者・団体・行政に求められるもの	131

## 第7章 日本人の食生活

1	世界の食卓は今	134
2	戦後の日本人の食生活	136
3	急成長した食品産業	137
	食品産業の位置づけ	137
	激化する業種業態間の競争	140

4	日本型食生活のバランスの良さ	142
5	食生活の基本パターン	145
6	飽食時代での食生活多様化	147
7	主婦たちの“食品好感度”	149
8	子ども、若者の食生活は？	156

## 第8章 活気づく農産物自給運動

1	急伸する農産物自給運動	160
2	自給運動の教育的効果	163
3	自給運動と高齢者	164
4	自給運動のネーミング	166
5	自給運動のキャッチフレーズ	168

## 第9章 「食」と「農」の接点

1	「食」と「農」の分離	172
2	都市化による人間形成の歪み	174
3	農村の疲弊——追い込まれた日本農業	176
4	安全性への危惧	180
5	「食」と「農」の提携	182
	◆クライinalgルテンとは何か	186

## 第10章 “文化時代”のむらづくり

1	村づくりからふるさとづくりへ	188
2	ふるさとづくり活動全国事例	189
3	農地を3つに分けて「農村振興」	192

4	村づくりは三位一体で	194
5	キャッチフレーズからみた村づくり	197
6	村づくり“変わりダネ”	198
7	農村振興の目玉「1.5次産業」全国事例	200
8	農山村のイベント・コンクール	204
9	「農山村のイベント」全国事例	207

## 第11章 都市と農村の交流

1	都会人をひきつけるふるさと祭り・イベント	214
2	「ふるさと村」のあゆみ	216
3	ふるさと情報センター	220
	(1)設立の背景	220
	(2)センターの機能	221
	(3)組織と財源	224
	(4)ふるさと情報システム	224
	(5)今後の展開は？	224
4	農業・農村は教育空間	226
5	ふるさと会員は満足気分	230

## 第12章 高齢化・混住化のなかで

1	“人生80年時代”の農村	236
	(1)「敬老」から「敬老プラス活老」行政へ	236
	(2)帰農高齢者たち	238
	(3)農村高齢者気質西・東	240
2	農業の新しい担い手	244

---

3	混住社会のなかの調和.....	249
4	文化の時代のむらづくりへ .....	253
5	新しい農村ファン層としての「都会」の青少年 .....	257

装丁・多田 進

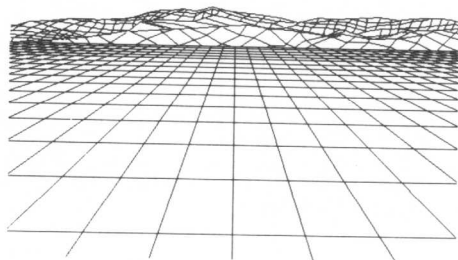
図版・ばらデザイン／東京光画／バラスタジオ

---

# 第 1 章

## 国土と緑

平野秀樹

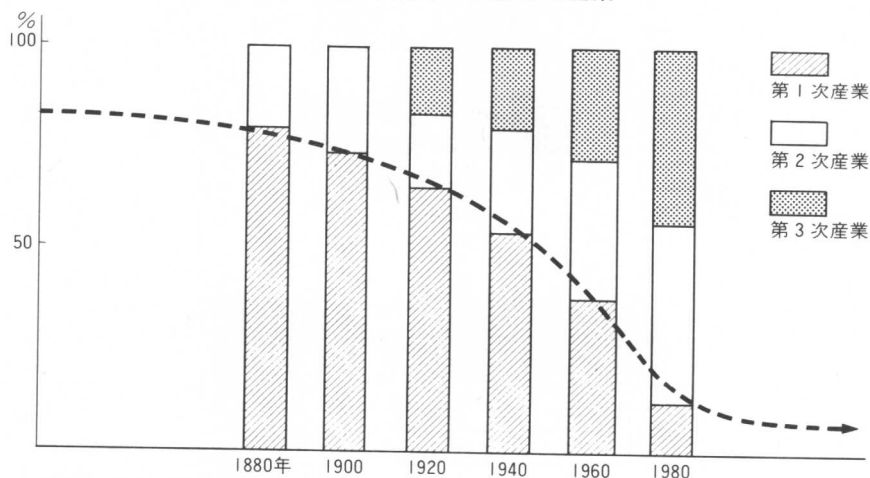


21世紀を考える視点、それは100年タームの超長期サイクルだ。人間の時間も大切だが、それ以上に森林の時間が大切である。

東京・代々木の森は100年で今日の立派な姿になった。緑ブーム、緑現象は21世紀の新しい価値観の胎動である。今後、親緑交流の盛り上がりのなかで、森林と人の新しいかかわりあいが増えていこう。

新人類を森人類に、温故知新を温故知森にしたいものだ。都市化の恐るべき進展や情報の嵐のなかで、近代物質文明の威力を過信し、傲慢にならないためにも。

図1 減り続けるか第1次産業



〔資料〕 総理府統計局「国勢調査」「労働力調査」

## 1 21世紀の国土観は

21世紀はいったいどんな社会になるのか。それは20世紀という変化に富んだ激動の時代とはまったく異なった社会となるだろう。

人口の増勢は沈静化し、やがて横ばいから減少へと変化するだろう。第1次産業への就業者人口比率も、19世紀までは75%前後で推移してきたが、今世紀には10%を割ってしまった。しかし、今後は減少もおさまリ、21世紀にはほぼ現状維持の1桁台で推移しよう(図1)。1人の女性が子どもを産む数も、ひと昔前は5~6人だった。それが近年、2人にまで落ち込んでしまったが、これも21世紀には安定化し、しばらくは2人のままで続くと思込まれている。平均寿命も同じだ。昔は40~50歳だったものが、20世紀には急激に伸び続け、20世紀末の今日人生80年になった。だが21世紀には、それもやがて頭打ちとなり、80年ライフサイクルが定着するであろう。

総じて、19世紀まで大きく変化しなかったものが、20世紀という100年の間だけ激しく変化したのである。だが、21世紀にはこの変化はもう続かない。穏やかな推移となる。

表1 21世紀の国土観イメージ

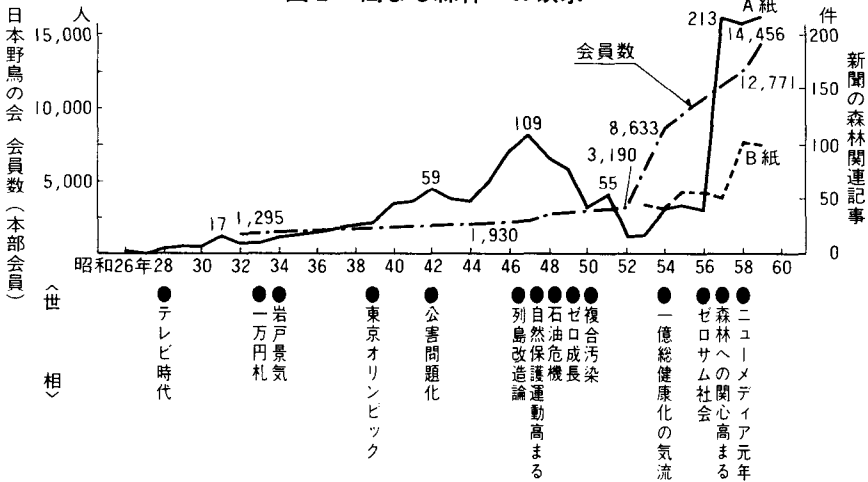
	20世紀	21世紀(新しい感性・森林観)
1. 自然	自然の征服	自然との共生
2. 生活	稼ぐための生活	人生そのものを味わう生活
3. ものの見方・視点	短期的視点 ダイナミックス	長期的視点 安定性
4. 嗜好	画一	個性
5. 文明の性格	近代科学・「石油と鉄」の文明 天地創造終末・有限性の概念 直接的世界観(進歩の幻想)	人間・森の文明 輪廻転生の概念 円環的世界観
6. 経済	フロー 物質・成長・巨大主義による 経済的効用重視の投資	ストック 公益・社会的効用、文化に配慮した投資

そんな21世紀を考えるには、100年タームの超長期サイクルでモノを見る視点がどうしても必要となってくる。その視点はいわば人間の時間ではなく、森林の時間による視点ではあるまいか。不動の存在、あるいは時間的観念をもたない永続的な存在の象徴——それが森林である。森林は、そもそも最も自然らしい自然であり、人間に自然体の生きかたをさりげなく示唆するのではあるまいか。それは、幼い日よく聞いた童話の世界を思い出せばわかるだろう。あまりにも自然体でなくなった今日の文明社会に、そのつど、乖離の是正を促し、極端な物質文明化を戒める、そんなお目付役が森林なのかもしれない(表1)。

よく知られる『チャタレイ夫人の恋人』。これは生きまどう人間の愛の可能性を確かめる文学であるが、その素材として森が重要な位置を占めていることは、あまり知られていない。このテーマは、実は近代文明(鉄の文明) vs 森の生命力なのである。

近年、生きまどう人の群れが、都会人を中心に増え始めた。彼らにとって重要なことは、生きざま再発見ではあるまいか。それは日常の喧噪から離れ、森の生命に触れ、森の叫びに耳を傾けることから始まるだろう。森というフィルターをとおしてモノを見たり、考えたりすることが今、古くて新しい。

図2 高まる森林への欲求



〔資料〕 国土庁計画・調整局作成 日本野鳥の会会員数は、日本野鳥の会調査

## 2 緑ブーム

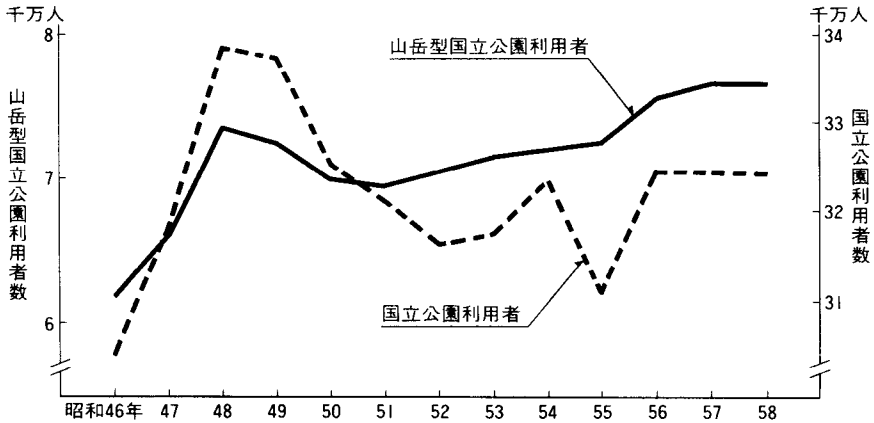
森林への関心が今日にいたり、異常に高まっている。新聞をはじめさまざまな情報分野の取り扱いにみるように、都市民を中心として、森林問題は一大関心事である(図2)。

その背景となる理由として、国際的には、熱帯林をはじめとする地球上の森林の急速な減少や、欧米先進国の酸性雨による森林荒廃がある。これらは、世界的な環境の視点から、また世界最大の木材輸入国・日本としての立場から、我々の関心をひかずにはおかない。国内的には森林の荒廃、林業の疲弊のほか、都市近郊の著しい緑の後退などの事情がある。

これら緑ブーム・緑現象は、21世紀の新しい価値観の胎動であろうか、それとも価値観の基軸移動の前兆であろうか。このような森林にかかわる新しい潮流をしかと見極め、人と国土の適切な関係——親緑交流を創りだし、国民参加の森づくりへ結びつけることが肝心である。

21世紀に向けて、人口増勢の鈍化、経済成長の安定化など、20世紀、とりわけ

図3 山岳型国立公園利用者の増加



〔資料〕 環境庁自然公園利用状況調査

〔注〕 国立公園利用者数は、27公園の合計、山岳型国立公園利用者数は8公園（大雪山・十和田八幡平・磐梯朝日・上信越高原・秩父多摩・中部山岳・白山・南アルプス）の合計

戦後40年間とはまったく異なった状況が見通される。求められる森林像も高度化、多様化しており、教育の場としての利用、ライフスタイルの変化に伴うアウト・ドア・ライフの舞台やふるさと住宅空間としての利用などが新しい（図3）。これらの傾向は、さまざまな地域との“交流”を前提とする新しい定住を成立させる条件ともなりえよう。

今後、森林はこれまでの経済的資源や国土保全などの公益的資源としての評価に加え、文化的資産としても重要性が増していくこととなろう。このことは今日の緑現象、ふるさと現象にその萌芽を見ることができる。

もはや森林は、単に土地資源や物質資源として受身的に存在するものではなく、より積極的な存在へと変化することが予見される。そういった意味で、今日は、森林と人とのかかわりにおいて、国土の脆弱性、有限性と裏腹に、多様な有用性を再認識すべき転換期である。

21世紀の日本丸の進むべきチャートは、森林と人との新しい関係の中に隠されているのかもしれない。以下はその絵ときである。

### 3 人と森林——そのかかわりあい今昔

日本において、史実に残る最も古い“人と森林とのかかわり”は、紀元前2200年(縄文時代)、北九州である。このころすでに農業による山地の開発——森林開発が始まっていた(図4)。

今でこそ、平地のほうが万事便利で住みよいと考えられているが、当時は必ずしもそうではなかった。暖帯性といえども湿度の高いわが国の、低湿な平地は、マラリヤほか、さまざまな伝染病の発生や夏季の洪水の危険性が高かった。むしろ山地部のほうが住むには適していたのである。

人間が森に対して抱く、最初の感情は、おそらく畏敬の念であったろう。とくに巨樹、巨木は人間よりも桁違いに大きいし、人間よりもはるかに永く生き続けている。地にひれ伏して崇拜したい気持ちに駆られたとしても、少しも不思議ではない。我々日本人は、古来「木」に対して素朴な民俗的信仰をもち続けていたのである。古代ギリシアでも、主神ゼウスは「ドドナの森」の1本の巨大なオークに宿るとされていたが、これは洋の東西を問わない現象であった。

3世紀に書かれた『魏志倭人伝』に卑弥呼の宮殿の記述があるが、このころから、すでに宮殿や寺社用建築材として森林が実に多量に伐採されていたのである。

この森林伐採の増加傾向は、平城・平安時代になってさらに続いた。わが国の人と森林のかかわりあいの歴史の中で、おおよそ“3つの転換期”が考えられるが、その第1番目に当たるのがこの平城・平安期である。人口は1,000万人台となり、森林伐採・開発へのインパクトは増大していった。建築用材、産業用燃料材のみならず、新たな林野利用形態として、営農用利用(採草放牧地、焼畑など)が始まり、里山森林が侵食されていった。

鎌倉時代に入ると、木材需要はますます増大し、良材を求めるとは畿内でまかないきれなくなり、遠く山陽の備中、周防へと産地を求めていった。室町時代には、産地はさらに、四国や東山地方へと広がった。

戦国時代は人々にとっても不遇な時代であったが、森林にとってもまた、暗黒の時代であったといえよう。戦乱や築城で放火、乱伐される一方、育林は忘れ去られ、森林は極度に荒廃していった。人々が森を想う余裕をなくした時代、ある